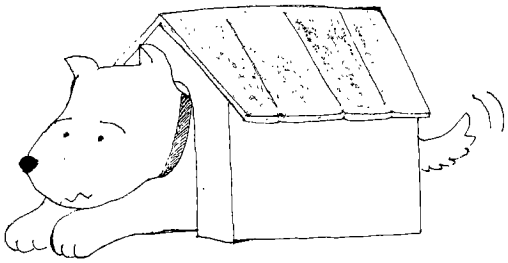
SEの知恵袋

第8回 ミスマッチ

野口 尚男 京葉システム（株）
妹尾 稔 名古屋商科大学



いろいろあるミスマッチ

最近フリーターが増大している．自由に時間がとれる，好きなことができる，という理由が多いようだが，自分の判断でマッチした職業が見つからないというケースも多いようだ．社会的にも放置できないとして文部省と労働省が本格的な取り組みを始めるという．

人生にとってミスマッチは歓迎できることではないが，長い人生には多かれ少なかれ避けられないことでもある．「会社のミスマッチ」だとか，「仕事のミスマッチ」や「上司とのミスマッチ」もある．とにかくミスマッチは人生にとってできれば避けたいものである．

学校教育と企業ニーズのミスマッチ

企業の求める人材と学校教育との間のミスマッチが大きいように思う．最近の学校教育は，国際感覚の育成や創造性に重点を置いているのはよいが，それだけに即戦力となる人材は少ないように思える．このため企業側は未来投資となる社内教育に時間をかけることになる．就職難の折，学生にとってはどこでも就職できれば，と思いがちであるが，ここにミスマッチが起きやすくなる．

一例だが，ソフト開発会社の面接に立ち会ったとき，会社はすぐ役立つ人間が欲しいのに大学で物理，物性の研究をしてきました，と言われても会社としては困る．本人は育てて欲しいのかもしれないが適性検査をしても最近の技術革新が速いこともあって適性を分かりづらくしている．もし採用後に適性がないとなればこれもミスマッチである．

最近の企業は大小にかかわらずすぐ役立つ人材を求めている．リクルートフェアがはやっていることでも分かる．学生自身が自分の方向性をはっきりさせていないこともあるが，学校はもっと学生の適性を早く見抜き，ふさわしい実践教育に重点を置くルートも考える時期にきているように思える．

科目選択のミスマッチ

産業訓練校でコンピュータ関係を指導していて，生徒に向き不向きを感じることがある．つまりコンピュータに向いていない生徒が少なくないのである．科目の選択にミスマッチを起こしているのだ．早く気がついて他の道に進めばよいのにと思う．しかし本人は何としてもITを身につけたいと思っているから指導も苦労する．中には光る生徒がいて他の生徒のペースに合わせた授業を聞かせるのがもったいない．この世界でも飛び級を作り，理解のいい生徒にはどんどんハイレベルな指導を与えたらよい．きっと優秀な人材が速く育つことだろう．

産業訓練校だから年齢がばらついている．4年間指導してきて感じることは，25歳を過ぎた者は，よほどセンスがよくないと社会に出て役立つか心配である．中にはかなりの頑張り者もいて，突然に急成長する生徒がたまにはい

るが...

マッチしていてもミスマッチへ

たとえマッチした優秀な生徒であっても，社会に出て30歳代半ばになると，開発力のスピードが落ちてくるし，新しいことへの吸収力も衰えてくる．つまりだんだんミスマッチしてくるが，これはある程度致し方ないことだ．ここで頑固に技術にこだわると，落伍者になっていく．自分自身の変化に早く気がつき，自己変革することができるかが大きなポイントになる．

企業ニーズとしての人材

それでは「ミスマッチでないSE」とはどのような人材をいうのだろうか．

企業にとって必要な専門知識を備え，できるだけお客とのコンタクトを増やし，クリティカルな厳しい経験をたくさん積み，30歳過ぎたらマネージャのセンスを磨く，つまり若いときに経験した知識を活かしてマネジメントできるようになること，このような努力を絶えずできる人たちを人材というのではないかと思う．ソフト開発事業ではお客が最も優れた教育者である．お客が何を求めているかをつかみ，開発すべきシステムの全体像を鳥瞰し，お客から歓迎される提案ができれば申し分ない．

お客との対話では必要にして十分な情報を把握する．経験的にいえることは，お客は聞きたいことを言ってくれない．もっと大事な情報を把握できていないことがしばしばある．お客の言葉の行間からニーズとかウォンツを探り出し，お客に膝をたたかせるような提案書を作る．この繰り返しが人材を育て，このように育った人材が企業にとって「ミスマッチ」でない人材だと思う．つまり「ミスマッチでない人材」とは，安心してお客に差し向けられるSEになること．このことが何より企業から期待されていることである．たとえば受託開発のシステムを受注した場合，「QCD (Quality Cost Delivery)」がきちんと見通せないとお客に差し向けられない．そのためには上司のお供を繰り返し，ノウハウをはやく身につけることだと思う．それには実力を備えることへの不断の努力が欠かせない．

信頼性を高め，徳を磨こう

さらにつけ加えれば，お客に頼りにされる人材になることと「徳」を磨くことが欠かせない．「徳」はつくづく大切だと思う．多くのSEの気がついていない点は，この「徳の不足」である．お客は専門知識だけを利用しようと我慢して付き合っている，ということはよく見受けることである．

それでは「徳とは何か」ということになる．もともと生まれつきによるところが大きいが，不断の心がけで備わってくることも多い．社会人には少なからず必要不可欠なものといえる．「サラリーマンは仕事ができれば徳なんてどうでもよい」という人もいるが，こういう人間が定年退職した後が惨めになる．極端にいうと「徳」のない者は，どこの社会へ行ってもミスマッチといえる．

「徳」を備えることはそんな難しいことではない．人間としての基本事項（挨拶をする，約束を守るなど）が備わっていて「謙虚さ」があり「笑顔」が自然で「気配り」があれば申し分ない．プロとしての実力を備えていることが前提であるが，お客から「あのSEは実力もあるし，話も巧い．とても感じのいい人だ」と言わせればよいのである．

業務知識の重要性

業務知識が身についていないこともミスマッチというべきである．自分は専門知識を持っていて自信がある，という若手技術者をよく見かける．しかし業務知識があるとなしでは開発の生産性が極端に違ってくる．

こんなケースがあった．業務知識はないがパソコンに精通していてC言語やVB (Visual Basic) ができるという学生がソフト開発会社にアルバイトにきた．自分ではかなり自信があったのだと思う．しかし短期の学生アルバイトに，業務知識を身につけさせている余裕のない場合が多く，ごく限られた仕事しか任せられないことになってしまう．

お客の開発プロジェクトの一員として参加するときは，客先の業務上の言葉を理解し，そこの社員と普通に語れることが大切である．鉄鋼会社の生産管理システムを開発するソフトウェアベンダに対し，鉄鋼会社なら新人でも知っている言葉「インゴット」「ビレット」「スラブ」を説明しなければならない．もし社内ならまったくかける必要のない時間をベンダSEの教育にかけねばならない，という経験があるが，こっちが費用を払って指導しているのだからたまったものでない．感性を駆使して作るゲームソフトとはわけが違う．何を作ればよいのか，プログラム言語を知っているだけでは作れるはずもない．

むすび

企業と学校のコミュニケーション不足から「ミスマッチ」が起きている．もっと企業と学校が連携をとり，「企業が求める人材とは」ということについて情報交換することも大切なことではないかと思われる．これから社会に巣立つ学生諸君は，ITの専門知識だけでなく，最近話題になっているインターンシップ制度などを活用して，できるだけ業務知識を身につけていただきたいと思う．

さらに，お客に頼られる「信頼」と「徳」も高めるように心しておいてほしい．また，今はマッチしていても徐々にミスマッチを起こしていくので，自己改革も忘れてはならない．

（平成12年10月6日受付）